

帝都復興祭における行列および音について

— 広告行列に焦点を当てて —

吉岡 三貴

1. はじめに

大正12年（1923）に起きた関東大震災からの帝都復興事業を記念して、昭和5年（1930）、帝都復興祭が行われた。帝都復興に関しては、都市計画、建築学的な視点からの研究は見られるものの、帝都復興祭における音・行列という視点からの研究はあまり見られない^(注1)。しかし、そこでは、概して4つの性格を持つ行列が行われ（[表1]）、市民を熱狂の渦に巻き込んでいったことが、残された資料から読み取る事ができる。さらにそれらは行列をする際に音及び音楽を伴うものであった。その中でも、帝都復興祭を利用し株式会社主催で行われた広告祭は、日本で最初と言われ、政府主催の行列とは一線を画す広告行列を伴うものであった。そこで本発表では広告祭・広告行列に焦点を当て、行列の在り方、そこでの音の役割を考察し、都市社会における行列及び音楽について探る手がかりにしたいと考える。

2. 帝都復興祭とは

2-1 概要

大正12年（1923年）9月1日に起きた関東大震災

により、東京は市内の2/3が焦土と化すという壊滅的な被害を受けた（内務省社会局 1926：249）。大震災直後の大正12年（1923年）9月27日、山本権兵衛内閣の内務大臣、後藤新平は帝都復興院を設置してその総裁となり、復興事業を開始した（北岡 1988：209）。その約7年半に渡る計画を受けて計画されたのが、帝都復興祭であった^(注2)。東京市役所（編）の『帝都復興祭志』（以下『帝都復興祭志』）によればそこには2つの目的があった様である^(注3)。天皇陛下に復興した帝都の実情を実際にご覧頂き奉告すること、内外の多大なる援助に対して復興を報告し盛大な事業を記念しようとする事だ。では、復興を報告するのは一体誰なのか。『帝都復興祭志』では、政府ではなく地方団体、つまり東京市が主体となるのが事業の性質であったという記述が見られる事から、報告するのは東京市であると読み取れる^(注4)。

以上より、天皇をお迎えするという、明確に国が絡む意図と、復興を内外に奉告して記念するという市民の祭としての意図という2つの方向があったのである。また、復興事業計画途中での予算の変更という事情（東京市役所 1932：6-18）も含め、帝都復興祭と

行列名	主催等	行列の構成	音、演奏曲目
天皇陛下御巡幸	内務省、東京府、東京市担当	計7台の自動車(警察官自動車、天皇の自動車、その後5台の自動車が続く)。	サイレンや花火で御巡幸を知らせる。《君が代》
小学校児童旗行列	東京市	東京市内230校の4年生以上約10万人	終了時に万歳三唱。演奏の有無不明。
	東京市教育局指導	東京市連合青年団、市立中学校、青年訓練所、市区補習学校各生徒約2万人。いずれも東京市所属団体	行列の先導に各音楽隊、ラッパ隊あり。行列と同時に花火が上がる。演奏曲目不明。
	東京市教育局指導	陸海軍音楽隊、府立の学校等、所属は東京市内に止まらない。約500人	《君が代マーチ》《帝都復興祝歌》([資料12])、各部隊の得意とするものを演奏。行進の目的地では合奏で《君が代》を吹奏。
祝賀行列	東京市考案	東京市公園課担当自動車	電気蓄音機を乗せ和洋数種の演奏を行う。電気蓄音機はヴィクターの大蓄音機。
花電車	東京市	東京市電気局の車両7台(「音楽車」「聖壽萬歳」「天の岩戸」「光輝」「花咲く春」「復活」「復興踊」)	先頭の「音楽車」には音楽隊を、最後尾の「復興踊」には蓄音機を搭載。《君が代》《東京交通行進曲》([資料13])《復興行進曲》《帝都復興祝歌》
広告行列	株式会社正路喜社	東京をはじめ全国各地の会社、商店163団体。	行列開始の合図には花火使用。行列時はジャズバンドを先頭に《廣告祭行進曲》を歌う。終了時には一同で《廣告祭歌》を歌い、万歳三唱。

(作成 吉岡)

[表1] 帝都復興祭で举行された主な行列

は市民による祭りであるという認識が強かったのではないか。

尚、帝都復興祭の開催月日についてはっきりと規定している文は、『帝都復興祭志』の中には見当たらない。その主な催物について記載している部分によれば、3月27日の陪食会をもって、帝都復興祭は目出度く終了した、と結んでいる^(注5)。しかし、新聞記事では3月26日に行われた市民の参加する提灯行列をもって祭の終了と報じている。ここに、政府と市民との認識の差がみられる。

- 目的…・天皇陛下に復興した帝都の実情を実際にご覧頂き奉告すること
- ・内外の多大なる援助に対して復興を奉答し盛大な事業を記念しようとする
- 日程…昭和5年3月26日(或いは3月27日)

2-2 昭和5年帝都復興祭における行列について

帝都復興祭において行われた主な行列は、概して4つある([表1][表2])。『帝都復興祭志』に記述がみられたものは、天皇陛下御巡幸・祝賀行列(小学生児童旗行列、提灯行列、音楽行進、音楽自動車)・花電車であり、各種新聞記事からは、広告行列の存在が明らかとなった。主催者、行列経路、目的、行列への市民の関わり方は一様ではなく、それぞれ異なった性格を有するものであった。

天皇陛下御巡幸([資料1])は、それ自体が帝都復興祭の目的でもあり、賑わされる対象である。天皇は、震災被害の酷かった本所区の方面にも足をのぼしている。

祝賀行列は東京市主催の帝都復興完成祝賀会の余興及び催し物として計画された。小学校児童旗行列・提

主催・関係団体		政府 内務省、東京府、 東京市担当				株式会社 正路書社	
行列名	天皇陛下御巡幸	祝賀行列	小学生児童旗行列	提灯行列	音楽行進	音楽自動車	花電車
関連する式典・祭等	帝都復興祭の目的の一つ	帝都復興完成式典・帝都復興完成祝賀会 帝都の復興を祝うため。 (帝都復興完成祝賀会の茶会及び催物として。)				広告祭(式典・祝賀会)	
日程	目的					高工大監 賢理局長 正路書社社長(各種新聞記事)	
時間	閉止					帝都の復興を祝うため。 「新著」『奇蹟』百本初「先導」という言葉で新しさを強調。「歴史的」という様に広告教団体に感銘を見出す記事もあり。 「新著」『奇蹟』百本初「先導」という言葉で新しさを強調。「歴史的」という様に広告教団体に感銘を見出す記事もあり。	
		(生産者と消費者の間機関として(市民の広告に対する親しみを増す。)				「新著」『奇蹟』百本初「先導」という言葉で新しさを強調。「歴史的」という様に広告教団体に感銘を見出す記事もあり。	
		賞品の振興へのため。(工業品の発展を海外発展を促し、国力の発展を促す。一帯の文化と各種商工業の中枢としての帝都を提議。)				賞品の振興へのため。(工業品の発展を海外発展を促し、国力の発展を促す。一帯の文化と各種商工業の中枢としての帝都を提議。)	
		(国内のみならず、産業貿易への発展を促す。一帯の文化と各種商工業の中枢としての帝都を提議。)				賞品の振興へのため。(工業品の発展を海外発展を促し、国力の発展を促す。一帯の文化と各種商工業の中枢としての帝都を提議。)	
祭開始前	3月21日 10:00						
	3月22日 10:00						
	3月23日 10:00						
帝都復興祭当日	3月24日 8:40						
	10:00						
	10:45						
	12:00						
	14:15						
	15:06						
	20:30						
	21:57						
	3月25日 10:00						
	3月26日 9:00						
	10:00						
	10:30						
	10:50						
	12:00						
	12:30						
	12:32						
	14:00						
	14:30						
	16:00						
	20:30						
	21:09						
	3月27日 9:00						
	10:00						
	12:32						
	17:00						
	19:00						
	20:30						
	21:11						
	22:00						
帝都復興祭終了後	3月28日 10:00						
	3月29日 10:00						
	3月30日 10:00						
	19:27						
	20:30						
	21:00						
	21:00						
	22:14						
	23:32						

[表2] 帝都復興祭で実行された、政府主催の諸行列と広告行列との比較

灯行列（【資料2】）・音楽行列（【資料3】）・音楽自動車（【資料4】）という4つの行列が含まれていた。音楽自動車は例外的な行列であるが、他の3つは東京市民の参加する行列であった。

花電車（【資料5】）も祝賀行列同様、東京市主催の帝都復興完成祝賀会の余興及び催し物であった。しかしこちらは、市民も行列に参加するものではなく、見る対象であった。花電車陳列は、天皇陛下御巡幸での天覧を目的としたものと、一般市民に向けて行われたものがある。よって、この花電車は、帝都復興祭の国への方向、市民への方向という2つ面を賑わしたものであった。

広告行列（【資料6】）は、株式会社正路喜社の主催するもので、東京をはじめ全国各地の会社、商店が参加した。つまり、帝都復興祭は東京市にとどまらず、外の人々にもひらかれた祭だったのである。元来見る

側にあるはずの祭当地者以外の人々も、見られる側に巻き込んでいるといえるであろう。尚この行列は、『帝都復興祭志』に記録がない。

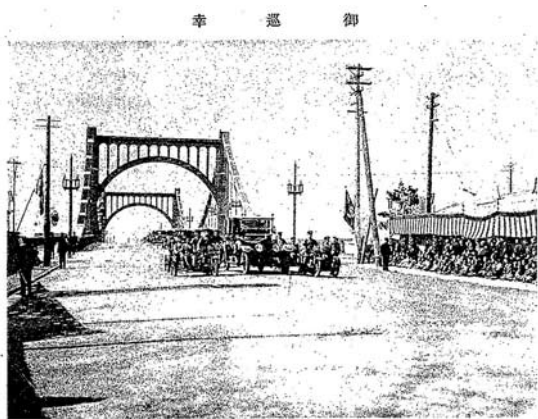
祭の目的	祭を賑わすもの
1 天皇陛下御巡幸 ……………	花電車
2 帝都復興完成式典	
帝都復興完成祝賀会 ……	祝賀行列・花電車 広告行列

3. 広告祭について

3-1 概要

以下、但し書きの無いものは、高森有吉著『どきゅめんと正路喜社』p.82-85による。

広告祭は昭和5年（1930年）3月25日に行う予定であったが、雨天により、翌26日に変更された。



薄 歯 の 過 通 御 橋 洲 帝

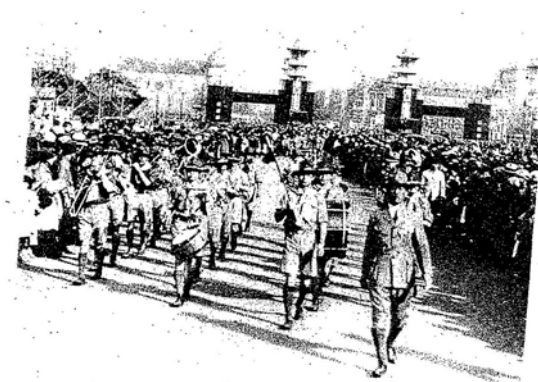
(東京市役所 1932 : 442-443)

【資料1】 天皇陛下御巡幸



(東京市役所 1932 : 518-519)

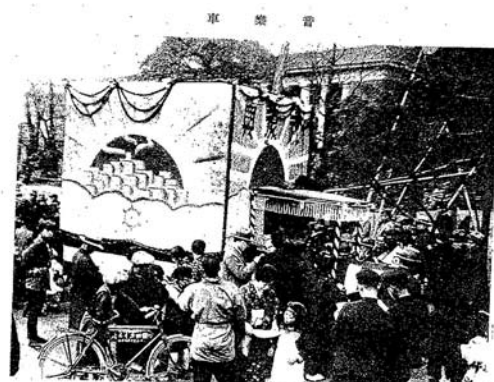
【資料2】 提灯行列



進 行 樂 音

(東京市役所 1932 : 518-519)

【資料3】 音楽行進

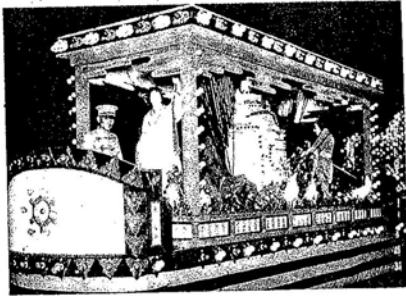


(東京市役所 1932 : 518-519)

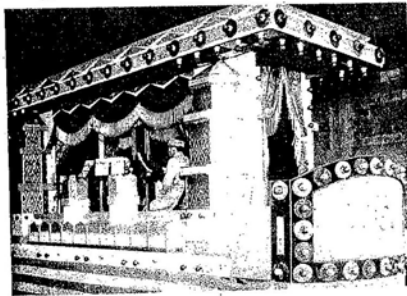
【資料4】 音楽自動車

【資料5 花電車】

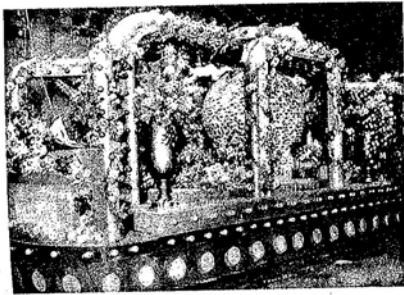
車 電 花



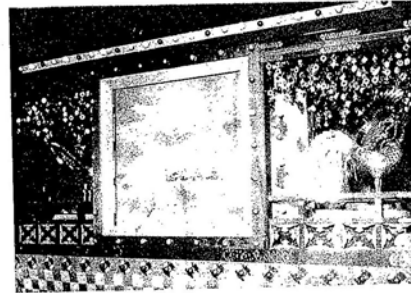
戸岩の天



車 樂 管



輝 光



歳 高 壽 聖

車 電 花



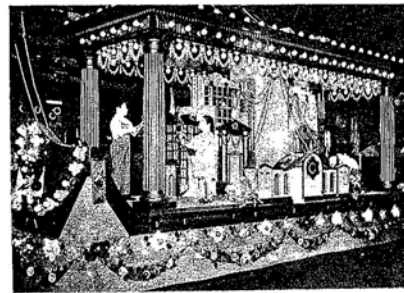
節 興 復



春 々 咲 花



車電花の過道を上*橋本口



活 復

(東京市役所 1929・514.515)

【資料5】 花電車

各種新聞記事及び高森有吉著の『どきゅめんと正路喜社』（以下『どきゅめんと正路喜社』）記載「新聞の日本」の記者によれば、12：30から広告祭が、14：00から広告行列が行われた。黒崎雅雄著の『広告祭グラ

フ』（以下『広告祭グラフ』）によれば、翌3月27日には19：30～22：00には広告祭感謝の夕が行われた。広告祭は神事と祝賀会に分かれている。

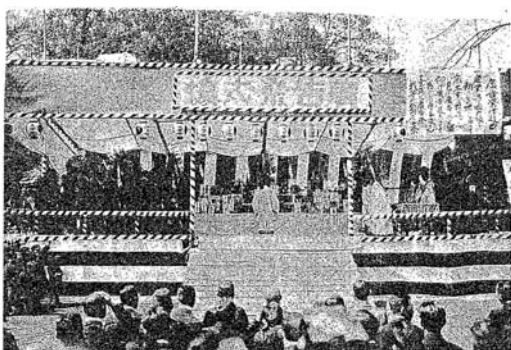
観 大 列 行 祭 告 廣



通 道 を 橋 本 日

(黒崎 1930 : 5)

【資料6】 広告行列



行 祭 祭 祭 日 本 宮 神 社 神 枝 日

(黒崎 1930 : 17)

【資料7】 日枝神社神官により祭典挙行

3月26日

- ①-1 広告祭 式典の神事 (12:30~)
- ①-2 広告祭 祝賀会 (式典終了後~)
- ② 広告行列 (14:00~20:30)

(予定では、16:30まで)

3月27日

- ③ 広告祭感謝の夕 (19:00~22:00)

広告祭の式典は芝公園増上寺隣の広場に特設された広告祭広場にて神式で挙行された。広場中央に祭壇が設けられ、祭神として福の神、大黒天(【資料8】)が安置される。笙、箏の奏楽のうち、神官、正路喜社重役、来賓一同着席。最後に一同起立し、《君が代》を二唱して式典の神事を終了する。

その後、広告祭実行責任者黒崎雅夫重役が祝賀会の開会を宣言する。正路喜社社長の挨拶や商工大臣等が続き、正路喜社専属ジャズバンドの《広告祭行進曲》合唱(【資料9】【資料11】)の後に式典と祝賀会の幕を閉じた。尚、広告祭プログラム(【資料10】)では、最後に万歳三唱との記述も見られる(黒崎 1930 : 15)。



天黒大たれら祀てしと神祭告廣てめ始
(廣愛氏那一太永森)

(黒崎 1930 : 17)



唱合の旗ソキネマとつ飾を儀最典式

(黒崎 1930 : 19)

【資料9】 式典最後を飾ったマネキン嬢の合唱

【資料8】 始めて広告祭神として祀られた大黒天



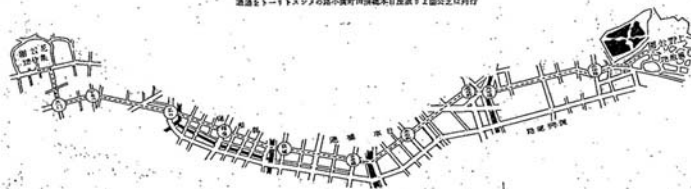
4人の列会つ目と目録典典

ムラゴロフ祭告廣

祭典順序		
祝詞	玉串	開
祝詞	奉	祭
祝詞	舞	の
祝詞	舞	典
祝詞	舞	序
祝詞	舞	終
祝詞	舞	閉
祝詞	舞	祭
祝詞	舞	典
祝詞	舞	序
祝詞	舞	終
祝詞	舞	閉

路順進行列行祭告廣

通過と→トマンの路小廣町内廣本町度廣り上園公正は列行



(黒崎 1930 : 15)

【資料10】 広告祭プログラム

広告行列は、花火を合図として正路喜社のジャズバンドを先頭に《広告祭行進曲》を歌いながら行列を開始した。東京朝日新聞によれば、「十隊に別れジャズバンドを各々先頭にして賑やかに市中をねり歩くことになつてゐる」(1930「華をきそふ御巡幸沿道 各区の催しに市から補助中に特異な廣告祭」『東京朝日新聞』3月24日)。徒歩隊、仮装車、新聞社のグループに分かれて行列をし、上野公園内の解散場にて到着順に解散。参加者全員の解散が終了したのが19:30。各地方新聞支局員、正路喜社社員等が、「広告祭万歳!

正路喜社万歳」を唱えて別れたのが20:30であった。因みに当初の終了予定は16:30であった。広告祭感謝の夕は、朝日講堂にて行われた。朝日新聞社撮影の復興祭ニュースの映画上映、広告劇、正路喜社から出演者への花輪贈呈、《広告祭行進曲》の独唱、正路喜社写真班による正路喜社ニュースの上映。万歳連呼のうちに22:00解散となった。

尚、読売、報知、東京日日、の各新聞社は広告行列に関し、3月22日、参加団体数163団体、仮装車134台、

参加人員989名、と報じている。

又、広告行列については、「参加諸君ノ誠意ニ信頼シ努めて寛大ニ處置シタリ」と警視總監 丸山鶴吉が祝詞で述べていたが、警視庁取締規則も存在していた^(註7)。

3-2 様々な立場からの目的（下線は吉岡による）

・株式会社正路喜社社長（布屋徹吉）の挨拶

「広告祭舉行趣旨 株式会社正路喜社長 布屋徹吉

(略) この七星霜優歡を共に頌てる、吾等其生業に従ふて、之れを慶祝するの用意のなからざる可からず。之れ即ち不肖の主宰する正路喜社が、敢て自ら測らず各位諸彦の高援に依頼し復興祭第二日たる三月二十五日を期して、帝都第一次の廣告祭りを舉行せんとする所以なり。(略)

宜なる哉先年英京ロンドンに世界廣告大會の開催さるるや、英國皇太子殿下親しく之に臨まれ「廣告は商品を世界的ならしめ、且つ失業を防止す」と宣せられたる事や (略)

一般の親密なる感情を誘發し、以て廣告効果上の無駄を省略し、進んで前述の如き米精神の徹底に貢献せんとするに他ならず。(略)

各位庶機は、我商工界發展の爲めに、又廣告宣傳の今般に對する善良なる諒解の爲めに、振つて賛同を給はり以て我市民に希望か輝く善き一日を與へられんことを」(黒崎 1930 : 1-2)。

『広告祭グラフ』掲載の株式会社正路喜社社長布屋徹吉の「広告祭舉行趣旨」の始めでは、帝都復興をお祝いする意図を見せている。しかし、同時に、広告が失業を防止するという引用を載せ、最後には「廣告宣傳の今般に對する善良なる諒解の爲めに」(黒崎 1930 : 2) という広告諒解運動を中心にした文面で締めくくられている。

一方で、後援者側（商工省、東京市、都下十六新聞社）は、どの様に捉えていたのだろうか。

・商工大臣（俵孫一）の祝辞

「祝辭 商工大臣 俵 孫一

(略) 産業ノ國際化ヲ益々必要トスル今日廣告界ノ新興ハ我産業政策上最も重要施設ノト爲ス、(略) 帝都復興祭ヲ機トシ一ハ産業復興記念ノ爲メ一ハ我國廣告界ノ現状打開ノ爲メ祭典及ヒ新趣向ニ成ル廣

告劇、行列行進ニ依リ廣告祭ヲ舉行セラルルコトハ頗ル時宜ニ適セル好企圖トキテ予ノ贊稱咨カナラサル所ナリ、抑々廣告祭ハ歐米輓近ノ創始ニ係レリト雖モ既ニ獨米英佛ノ或ル都市ニ於テ八年中行事ノ一トシ著大ノ効果ヲ收メツツアリ、(略) 廣告祭ノ旨意目的ハ社會ヲシテ廣告ナルモノニ興味及ヒ親シミヲ有セシムルコトニ依リ一般大衆ノ同感性ヲ養ヒ廣告ヲ生産者及ヒ消費者ノ中間機關トシテ廣告ノ力ヲ最も合理的ニ發揮スルニ在ル故ニ今回ノ舉ニシテ果シテ計畫者ノ豫期ニ違フコトナクバ實ニ國民經濟上需給關係ヲ圓滑ニシ得ルノ利アルノミナラス我産業貿易ノ振興期シテ待ツヘキアルヲ疑ハス (略) 昭和五年三月二十六日」(黒崎 1930 : 3)。

商工大臣の俵孫一は祝辞のなかで「一ハ産業復興記念ノ爲メ一ハ我國廣告界ノ現状打開ノ爲メ」と述べているが、広告祭の目的に関しては、先の広告諒解運動と意見を同じくしている。また、海外の動向を意識し、国内のみならず、貿易の振興への期待も見られる。

・警視總監（丸山鶴吉）の祝詞

「祝詞 警視總監 丸山 鶴吉

爰に帝都ノ復興成リ車駕親臨ヲ仰ギ奉リテ祝賀ノ盛儀ヲ擧ゲラレタルニ因ミ祝賀行列ノ一トシテ廣告祭ヲ舉行セラル、(略) 夫レ帝都市民ガ未前ノ災厄ニ遭逢シタルモ、尚斯ノ如キ迅速ナル復興ヲ見タル以所ノモノハ各當局ノ適當ナル施設ト市民ノ堅忍不拔、凜然タル意氣ノ然カラシムル所ナリト雖、其ノ其調ヲナスモノハ、帝國ノ文化ト各種商工業ノ中樞地トシテ帝國ノ使命ヲ制スルガ故ナリ (略) 延テハ我工業品ノ海外發展ヲ促シ國力ノ發展ニ寄與スル所測ル能ハザルモノアリ、之レ予等ガ常ニ正シキ廣告ノ發達ヲ希望シテ止マザル所以ナリ

今回ノ企ハ單ニ復興祝賀ノミナラズ市民ガ廣告ニ對スル親和ヲ増スニ貢獻スル所大ナルヲ信ジ、予亦夕滿腔ノ贊意ヲ表シ予ガ所管ニ屬スル事項ニ就テハ、参加諸君ノ誠意ニ信頼シ努めて寛大ニ處置シタリ、(略) 昭和五年三月二十六日」(黒崎 1930 : 4)。

警視總監の丸山鶴吉は、祝詞で、祝賀行列の一つとして広告祭が挙行される、と述べている。「市民が廣告ニ對スル親和ヲ増スニ貢獻スル所大ナルヲ信ジ」という、広告の諒解についても述べ、さらに、帝都の復興は「帝國ノ文化ト各種商工業ノ中樞地トシテ帝國ノ使命ヲ制スルガ故ナリ」と「帝都」を意識した発言もみられる。

・各種新聞記事

- (復興祭の賑わいを作り出すものと捉えた記述
- ~~~~新しさに焦点を当てた記述
- 広告祭自体に価値を認めた記述)

「此奇抜な廣告祭はいやが上に人気をそゝるだろう」(1930「宣傳意匠の尖端をゆく壯觀な「廣告祭」復興帝都人気の焦点＝主催は正路喜社＝」(『中央新聞』3月2日)

「来る廿五日聖上御巡幸の翌日を期して帝都復興を祝福する日本最初の廣告祭に各映畫會社が假裝行列を參加させる」(1930「假裝行列の趣向 廿五日日本最初の廣告祭」『毎夕新聞』3月22日)

「萬都の興味と期待と人気を集めた日本最初の正路喜社主催の歴史的廣告祭(略)當日の呼び物たる行列行進は思ひ思ひの意匠を凝らして(略)日本最初の珍妙な廣告行列」(1930「呼びものゝ廣告祭 ヤンヤの喝采を浴びて練り歩いた珍妙な行列」『万朝報』3月26日、夕刊)

当時の新聞記事を見ると、「復興祝賀行列」「帝都復興を祝福する廣告祭」「呼物」という記述が見られ、帝都復興祭の賑わいを作り出すもののひとつである、という認識があるようだ。一方で「宣傳意匠の尖端をゆく壯觀な」「歴史的廣告祭」という広告祭自体に価値を見出している記述も見られるが、その数は前者に比べて圧倒的に少ない。又、「奇抜」「珍奇」「日本初」という新しさを強調する記事が多くみられるのも注目に値する。

以上より、「帝都の復興を祝う」という事は共通した認識だったようである。「広告の諒解のため」という事も新聞記事以外では述べられているが、それらの重点の置き方は違う様だ。

正路喜社の外からは、帝都復興祭を祝し賑わいを作り出すものとしての認識が強かった様であるが、当の正路喜社からすれば、もともとあった構想を実現するのにちょうど良い場が帝都復興祭であった、という認識があったように読み取れる。政府の側からは、帝都に向けられた国内外からの視線、「帝都」をかなり意識した発言がみられる。又、各種新聞記事には「新しい」という記述が多く見られる。様々な立場からの意図が交錯している様子が窺える。

3-3 広告祭及び広告行列の音

曲の使い分け

新聞記事及び、『広告祭グラフ』『どきゅめんと 正路喜社』によると、広告祭と広告行列では、使用された曲が異なる。広告祭の式典は神式で、笙や箏の奏楽により、「厳肅に」執り行われた。参列者全員で《君が代》を二唱し、式典は終わる。続く祝賀会の終わりには正路喜社専属のジャズバンドによる《広告祭行進曲》の合唱が行われる。そして、広告行列は花火の音を合図に、正路喜社専属のジャズバンドを先頭に、《広告祭行進曲》を歌いながら行進を開始した。それぞれの行列は、徒歩隊・仮装自動車・新聞社のグループに分かれて、行進をしていた様である。又、十隊に分かれて、それぞれ先頭に楽隊がいた、という記事も見られる(1930「華をきそふ御巡幸沿道 各區の催しに市から補助中に特異な廣告祭」『東京朝日新聞』3月24日)。

意図されなかった様々な音

以上は事前に計画されて意図的に出された音であるが、祭及び行列では、参列者や観客から発せられた様々な音があった。式典開始前から太鼓や笛の音で賑わう。行列の最中は、参列者から囃される鳴物、そして観客側からの微笑哄笑、掛声、拍手、さらには警官からの怒鳴り声、と、様々な音が飛び交っていた様子が各種新聞記事からは窺える。

「万歳」の声

広告行列は、道中、又、上野公園にて「広告祭万歳！正路喜社万歳！」の声を挙げている。提灯行列及び音楽行進が宮城前広場に集合し、「万歳」を三唱しているのとは一線を画している。


「ジャズ」と新しい盛り場「銀座」

「ジャズ」という記述が多用され、「銀座を目指し」という記述があるのも、注目に値するであろう。関東大震災により、日本橋、人形町、深川、浅草などの盛り場が打撃を受けた事とその後のデパートの進出により、銀座が盛り場へと変わっていったことも指摘されている(日本近代史研究所 1980a:146)。それは、「ジャズ、ダンス、映画、スポーツの流行とあいまって、各地の盛り場にも、大きな影響をおよぼしていった」(日本近代史研究所 1980a:146)。新しい盛り場「銀座」とそこで演奏された「ジャズ」。そして各種新聞記事での「珍奇」「奇抜」「日本初」という「新しさ」を強調した言葉が頻出も注目すべきである。これらの点に関しては、今後さらなる考察が必要である。

歌 作 曲 進 行 祭 告 廣


廣 告 祭 行 進 曲

堀内敬二作曲



一、産業興り国力振興
新らしき世を導きて
商工業は躍進せよ
見よ廣告は其の先驅
抑げ廣告、先ありてこそ
良き商品は普及せん
喜べ、語れ、廣告祭
我等が感謝、廣告祭

二、榮ゆる市場呼びゆく厥路
繁榮の道跡みなく
合理化し行く商工時代
見よ廣告は其の基幹で
抑げ廣告、先ありてこそ
良き商品は普及せん
迎へよ、歌へ、廣告祭
我等が感謝、廣告祭



トランペット隊が進行する祭を導く行進曲

(黒崎 1930: 13)

【資料11】 《廣告祭行進曲》

4. おわりに

以上より、以下の4点が言えるであろう。

廣告祭…様々な意図が交錯した場

帝都復興祭では、政府の主催した行列のみではなく、株式会社が主催した祭及び行列も含まれていた。そこには様々な立場からの意図が交錯していた。それらを実現するものとして、時宜に揃っていたのが廣告祭及び行列であったといえよう。

曲の使い分けという音楽の利用法

他の行列では宮城前広場での万歳や、《君が代》の演奏が行われていたのに対し、廣告祭は式典において笙や箏が奏され《君が代》が二唱されている。そして行列ではジャズバンドを先頭にしていたのである。つまり、式典と行列では使用する曲を分けていたのだ。

「新しさ」の象徴としての「ジャズ」

天皇陛下は、浅草等かつての盛り場を巡幸したが、広告行列は銀座という新しい盛り場で賑わいを見せていた。そこでは「ジャズ」ということが盛んに叫ばれている。各種新聞記事では「珍奇」「奇抜」「日本初」という表現が目立ち、新しい、という事が前面に出されている。「日本橋方面からやって来チンドン屋の行列を摺れ違った。一方は初期の広告媒体として郊外あたりに漸く其名残りを留めて居る旧式の広告行列であ

り、一方は最新最鋭の広告の粋を集めた行列で、誠に珍妙な対象を為した」(高森 1972: 86) という記述もそれを如実に表現しているといえよう。つまり、「ジャズ」とは、「銀座」とともに、新しさの象徴として使用されていたのではないだろうか。

行列を先導するものとしての音

尚、音が行列を先導する役割を担っていたことは、帝都復興祭で行われた行列を通じて言えることであろう。

注

- 1 本研究に関連するものとして、花電車について扱った橋爪紳也 1998『祝祭の〈帝国〉』東京：講談社：92-139や、歓迎のディスプレイという視点からの吉見俊哉 1999『都市の装飾』青木（編）『近代日本文化論5 都市文化』東京：岩波書店、盛り場という視点からの吉見俊哉 1987『都市のドラマトゥルギー』東京：弘文堂等がある。
- 2 因みに、帝都復興祭が公的に企画されたのは、「昭和四年十二月六日 堀切東京市長八赤十字社東京支部樓上ニ東京府知事、警視總監ト會合復興祭ニ關スル協議ヲナス」(東京市 1932: 673) とあることから、昭和4年12月6日とみられる。
- 3 「仍て東京市は斯の如き曠世の大事業完成を機に陽春

三月をとし、畏くも聖上課陛下の御親臨を仰き奉つて復興帝都の實状を奉告して千歳一遇の光榮に浴さんことを希ひ、一は内外の廣大なる援助に對し帝都復興を報答し、以て盛事を永く記念せんとする趣意によりて帝都復興祭の舉行を企てたのである」(東京市役所 1932: 19)。

4 「前記小公園新設以下の事業に對しては始めは政府に於て補助金を交付し、または起債を保證し、市債利子を補給するといふ財政的援助を與ふる豫定であつたか臨時議會に於て事業の性質上、之を地方團體をして試行せしむるを至當なりとの意見に依り、豫算を修正減額し、結局土地區劃整理事業の大部分、街路修築の一部に限り、政府に於て補助金を交付し、其の他の事業に對しては新たに貸付を行ふことになつた」(東京市役所 1932: 6-18)。

5 「帝都復興の大業竣つて三月二十四日、新装の大路には、春光かかやかに鳳駕の親臨を仰き奉り、重ねて三月二十六日、帝都復興完成式典へ臨御を給ふ、實に帝都甦生の歡喜はここにみち、かしこに溢るる一大盛觀を迎へた」(東京市 1932: 19)。

「更に三月二十七日 皇室に於かせられては復興關係者二十八名に、慰勞の御思召を以て御陪食を仰付けらる。(中略)。かくて陰惨の焦土より蘇つて曠世の偉業を完成し、至上の聖恩に霑浴して茲に目出度く帝都復興祭を終了したのである」(東京市役所 1932: 23)。

6 「來つ二十四日から三日間に亘つて行はれる帝都復興祭」(1930『讀賣新聞』3月23日、第2面)。

「色様々な電飾に歡びの街・光の海 七臺の花電車は三原橋で展覽に 歌へ、踊れの三日間」(1930『讀賣新聞』年3月23日、第7面)。

7 「参加假裝車其他の規定(廣告祭参加裝飾物の警視廳取締規則)

- 一、自動車の長さ十五尺以内
- 一、車の長さ十二尺以内
- 一、牛馬は絶対に使用せぬ事
- 一、製作物の長さは十尺以内、巾六尺以内
- 一、旗及幟の高さ十尺以内
- 一、女及び十六歳未満の男子の参加は絶対にお断りす」(黒崎 1930: 77)

参考文献・参考資料

- 青木保、川本三郎、筒井清忠、御厨貴、山折哲雄(編)
 1999a 『近代日本文化論5 都市文化』東京：岩波書店。
 1999b 『近代日本文化論7 大衆とマスメディア』東京：岩波書店。
 株式会社 講談社(編)
 1998 『昭和二万日の全記録 第2巻 大陸にあがる戦火 昭和4年⇒6年』東京：講談社：150-153。
 川端康成
 1970 「新東京名所」『川端康成全集第十三巻』東京：新潮社：31-41。
 北岡伸一
 1988 『後藤新平』東京：中公新書。
 黒崎雅雄(編)
 1930 『廣告祭グラフィ』東京：正路喜社。
 高森有吉
 1972 『ドキュメント 正路喜社』札幌：北海道正路喜社。
 東京市役所(編)
 1932 『帝都復興祭志』東京：東京市役所。
 内務省社会局(編)
 1926 『大正震災志 内編』東京：岩波書店。
 日本近代史研究所
 1980a 『画報 日本近代の歴史9 岐路に立つ昭和日本』東京：三省堂。
 1980b 『画報 日本近代の歴史10 非常時への傾斜』東京：三省堂。
 橋爪伸也
 1999 「都市の裝飾 歓迎のディスプレイをめぐる」
 in 青木(編) 1999a: 157-172。
 原武史
 2007 『増補 皇居前広場』東京：筑摩書房。
 吉見俊哉
 1987 『都市のドラマトウルギー』東京：弘文堂。
 2002 『拡大するモダニティ』東京：岩波書店。